

大学における LGBT 学生への支援に関する研究

中村 果鈴 (Karin Nakamura) 指導：岩崎 香

1. 研究の背景と目的

LGBTとは、セクシュアルマイノリティ（性的少数派）の人々を指す言葉である。女性に恋愛感情を抱く女性であるレズビアン（Lesbian）、男性に恋愛感情を抱く男性であるゲイ（Gay）、女性にも男性にも恋愛感情を抱くバイセクシャル（Bisexual）、自身の性に違和感を持つトランスジェンダー（Transgender）の略称である。LGBTの割合は日本の人口の7.6%であるとされており、社会的認知は広まりつつある。また、全てのLGBTの人々が支援を必要としているわけではないが、支援が必要な人が必要な支援を受けることができているとは言い難い。当事者への誤解や偏見があるためにセクシュアルマイノリティであることに悩み苦しむ人がいることすら認識されていない場合もある。そこで、本研究では、大学におけるLGBT学生への支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

関東近県（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の大学129校に郵送でLGBT学生の支援に関するアンケート調査を行った。さらに、LGBT支援を先駆的に実践している大学、LGBT支援に力を入れている行政、企業、当事者を対象にインタビュー調査を行った。

3. 結果

大学を対象としたアンケートに関しては、46大学から回答があり（回収率：21%）、LGBT学生支援を行っている大学は12校で、準備中という回答も6校あった。支援していないと回答した大学の多くが、拒否しているというわけではなく、これまでLGBT学生の相談がなかったという回答

であった。LGBT学生の支援をしている12校のうち、「不明」、「公表できない」という旨の回答をした大学が2校あり、その2校を除く10校の支援を受けている学生数は総数14名で、障害学生として支援を受けている総数214名の6.5%を占めていた。

LGBT支援を先駆的に実践している大学、LGBT支援に力を入れている行政、企業、LGBT当事者のインタビューからは、社会へのLGBTの周知は進んでおらず、周囲の知識や理解が十分でないことから、支援と同時に周知や啓発の重要性が語られた。

4. 考察及び結論

調査結果から、LGBT学生は一定数存在しており、長年障害学生支援を実施している大学ではその学生たちへの支援を行っていく必要性を認識していた。しかし、知識、経験のなさから、支援している大学でも本当にこのやり方良いのかと模索しているのが現状であり、支援を必要としている学生が大学に相談することを思いつかない状況があることも推測された。本研究においては、大学の他にも、LGBT支援に携わっている組織、当事者へのインタビューを実施したが、先進的な取り組みを実施している組織の認識として、LGBTの人に限らず多様性を尊重し、生きづらさを感じる人がいない社会の実現への志向が見られた。しかし、いまだ現実の社会には差別や排除が存在しており、自分の性のアイデンティティに悩むということ以上に、仲間や社会に受け入れられないことで悩むことも多い。大学においても相談をしやすく、当事者達が声を上げやすい環境を整備していくことが求められている。